

俳句



教室「道草の詩」^{うた} 秋葉 みよ子

大猛暑

朝戸風クシヤミ連続花粉病
梅雨晴れ間兄の収骨車椅子
達筆な友の絵手紙夏見舞
郵便夫炎暑日続く日焼け顔
群衆は待ちて花火師祭典を
秋風に誘われ散歩延ばす距離
霧待てば晴れて穏やか村祭り

式部の実

年明けや放出図書の十冊を
黒々と整へられし春の畑
一木に芽吹きが遅速ありにけり
木の芽雨車の上に土の上に
刈込みの五つ残され合歓の花
新涼や「傘寿の会」の案内くる
紫の色まだうすき式部の実

富田 相葉 正子

蝸牛

蝸牛足跡残しさて何処
何事も老後の日日や蝸牛
梅雨間晴散歩擬もどきの庭歩く
荒梅雨や曾孫二人のトランポリン
会話なく滞る声梅雨の冷
変哲も無き自主トレや夏に入る
杉木立裏山育ちの蝉しぐれ

日々草

師の面影揺れて仄めく振り花
紫木蓮安否気遣う人ありぬ
インド赴任の父送る嬰日々草
忘れぬ健脚の母冬すみれ
牙返る化粧瓦の大普請
卒寿越え姉さん冠り大根蒔く
篤き手の夫に捕わる鈴虫の音

本須賀 今関 紫苑

木原 伊藤みや子

森 石橋八重子

沙羅の花

今年こそ命ふきかけ菊根分
満開や雨しずしずと沙羅の花
紫陽花や小雨にけむる長屋門
手作りのコーヒーゼリー夏きたる
水鳥のとび立つ羽音初夏の川
古文読む眠気いづこに秋深し
侘助を生けてひとりの茶をたてり

森 遠藤三千代

蟲ども雀ども私ども

墓の間ひ藪にかへせば鼻拍子
不思議を問はば如何にもと守宮ゐる
蜻蛉の後棒かつきまはり道
蜘蛛なれば風に浮くま身のものかな
打ち水やゐきものどもの大きはぎ
刈り小田やてんでに喋る雀ども
悪漢を懲らすとゐふや夏神楽

東金市(山武俳句会)

木村 一夫

春の色

縁側に春光入りて指定席
春めくや体すばやく動きをり
切株に座して一服風薫る
春の日の睡魔に負けてしまいいけり
春灯や思い巡らす旅心
花時や目の輝きて好奇心
春風や夢を乗せては開く地窓

木原 鈴木とし子

膝小僧

九十九里町(かずさ俳句会) 飯塚けいじ
十葉のはびこってゐる戦士の碑
郵便夫音一つ置き梅雨晴間
虫干しの捨てられぬ服吊るされて
生き物のように雲湧く夏の空
青葉闇いくさを語る杖と杖
闇に生れ闇に消えゆく大花火
手花火に四つ揃える膝小僧

初日の出

九十九里町（かずさ俳句会）

石橋

利子

コロナ禍や自宅に拝す初日の出
幅海苔をかけて雑煮の旨きかな
桜散る屋台閉ざさる八鶴湖
芍薬の一花になごむ狭庭かな
閑人のぶらり立ち寄る梅雨の家
一輪のカサブランカに今朝の幸
窓越しの屋根の間に遠花火

辻地蔵

九十九里町（かずさ俳句会）

内山

輝子

瓜漬けて今もかなわぬ母の味
軒深き造り酒屋や梅雨じめり
春の雨予定なき日の長電話
青春を語れ母校の大桜
花辛夷宿場はずれの辻地蔵
初日記主婦にも欲しき文机
大病もなくて向き合い冬至粥

初風

横芝光町（かずさ俳句会）

向後

寛

初風や日の丸しかと翻る
大内山初松籟を寿ぎぬ
探梅や古城の坂を上り来て
伝来の兜飾りし子供の日
母の日に母を超えにし卒寿かな
還暦の教え子揃ふ夏座敷
立秋や朝の体操一、二の三

初神籤みくじ

蓮沼

石橋ゆり子

小熊手や何かいいことある年に
寒見舞九十九里産味醂乾
登る坂七十五年初神籤
鶯に迎えられたり四方の空
比類なしそのやさしさと花の色
飛花落花門閉まりたる廃校舎
鳥除けをかけて種子蒔く雨上り

一号二号

佐倉市(市内在勤) 稗田 寿明

差し入れの缶コーヒ―を手に余寒
市役所のトイレを借りる納税期
ほろ酔ひの顔の集まる夜の桜
片方の靴下残る露台かな
猫の眼となるまで月を見てゐたる
饒舌も寡黙も個性毒きのこ
アヒルちゃん一号二号冬至風呂呂

さんむ緑風さわやか

下之郷 平澤千恵子

元日や天が広がり祝杯を
孫の声地下の祖父母に春彼岸
降る雪や静寂の晩銀世界
盆僧が喉をうるおす麦茶かな
天と地をくまなく照らす夕月や
きらめくや群星降りし凍てる夜半
刻一刻惜しむ夜通し大晦日

門松

小松 斉藤 利治

門松のもの云う如き青さかな
冷めやらぬトウガン汁を眺め待つ
コスモスへ巫戯けて声を掛けてみし
白紙へ「おでん」と綴るそうし度く
万両の只一色に寿ぎぬ
夏亀の水より出でし重さかな
掌へ竹の息吹きや落葉掃き

私の生活

本柏 竹之内幸子

チチチーと線香花火久しぶり
西瓜棚ツバメ飛び交う道の駅
風音と飛行機の音青い春
稲苗と天気予報で田植え決め
田ならして白鷺下りて二歩三歩
カタカタと田植機押しして一休み
日照り続き胡瓜しの字でぶら下がり

青岬

本須賀 川島 隆

極月や母の年忌の新塔婆
日脚伸ぶ免許更新恙なく
春の雪風紋かくす程でなく
啓蟄や垣の消毒念入りに
五枚ほど植田となりぬ散歩道
此処からは九十九里浜青岬
潮の香の銚子大橋夏来る

羽衣

壇谷(さんぶの森吟行俳句会) 大掛 史子

市制一五〇年祝ぐ花の雲
羽衣の伝承千葉に松在りて
小面こおもての天女かろやかに春天へ
艶くや二星の逢瀬里神楽
神楽鈴振りて幼な日顕わるる
神楽とはかくも楽しと吸われし日
秋気裂き心耳を抉る薩摩琵琶

白芙蓉

大堤 藤代百合子

唸り出す遠く近くの稲刈機
豊の秋移動スパー我が町へ
唐辛子持つて行くかと根こそぎに
茶の花やいつも穏やか友の顔
楚楚として資材置場の白芙蓉
透百合綻ぶ朝のひかりかな
柿の実を挽ぐこともなき里の家

母の小指

八街市(さんぶの森吟行俳句会) 浅野 重子

春愁や猫も日向で大欠伸
敗戦日偲びて灯す五燭光
マニキュアの母の小指に光る風
夕立や咄嗟に被るエコバック
秋の蚊にてんやわんやの車内かな
暮早し畑に忘れし鍬一丁
焼いもの匂ひ気になる午後三時

四季歳々

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

鵜澤

正信

天心の雲突き破り落雲雀

ゆさゆさと枇杷の実の枝震度四

赤べこはゆらゆら落雷の波動

秋桜の畑空と広さを競ふやに

秋澄むや長き裾野の赤城山

落葉せし嶺より望む茜富士

千年のマグマ抱えて山眠る

備前壺

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

神保ミツエ

初孫のひらがなおどる年賀状

初釜へ吸ひ込まれゆく火の香り

通ひ路にはや紅梅の二、三輪

蠟梅や叔父の形見の備前壺

大壺にもてなしの百合今朝の宿

落ちてなほ言の葉ありし沙羅の花

備前窯炎は神とならん朱夏

かすかな風

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

崎谷

弘子

木犀やかすかな風に回り道

紅葉狩ツアー客待つ運転手

風に揺れ光に揺れて黄葉かな

秋茜迷ひてもとの棒の先

おぼろ夜や日の匂ひある万歩計

菜の花や旅の途中にゐるやうな

緑蔭や風を待ちつつ人を待つ

青山椒

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

戸村真理子

馬駆けて初蝶ふはり棚を越ゆ

麦秋や戦禍の子らへ届け本

迷ひ来て山路にしかと青山椒

青葉雨四肢のびやかに甦る

小鳥来て庭やはらかく息を吸ふ

読み終へて夫に手渡す夜長かな

ねじのごと冬芽挙りて空を突く

小さきエンゼル

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

能瀬

五月

清流の小さきエンゼル花藻かな

トリミング終へて香水纏ふ犬

敬老日平凡パンチ懐かしく

朝影におはぐろ止まる重さかな

葛餅や二人の午後の甘からん

サイダーの泡かき回す初デート

打拔きの水にうるほふ夏の旅

苔の花

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

藤巻

佳子

花筏鳩の分け入り啄めり

長雨やたなびく梨の花の黙

山里丸灼灼と咲く桐の花

高麗の異国情緒や祭笛

戯れし智恵子の浜や卯波寄す

滑空の飛魚とびおめざすは鳥島か

しらびその森苔の花みづみづし

ことば

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

本堂

良衣

かいつぶり親の水輪に子の水輪

凭もたれゐる弁慶橋の小春かな

忠敬の歩測の跡や花大根

山百合の添え木の影のやはらかし

松据ゑて舞ふ「羽衣」や夏の月

星涼し言葉やさしき便り来る

サイダーに君の言葉を溺れさす

夏の朝

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

山田由紀子

古樹大樹森囁ける夏の朝

新緑の真つ只中にゐて孤独

土器塚の草に安らぐ揚羽かな

姫女苑楚楚たる影を陽に揺らす

夏帽子目深に憂ひごと隠す

チェンバロの小夜の調べや涼しけれ

愚痴ひとつ零せば真夜の月笑ふ

私の俳句

高富 吉村 孝子

水仙が違う場所で咲いている

五月でも熱中症にきをつけて

子供の日大地震来て大さわぎ

久しぶり白サギ二羽が田で遊ぶ

花いかだ乗つて何処まで行けるかな

新茶つみ天ぷらにしてお茶づくし

おぼろ月寝ながら見られ幸せよ